

Amartya Sen
Reason before Identity: The Romans Lecture for 1998

(Oxford: Oxford University Press, 1999)

後藤 玲子

1. はじめに

ノーベル経済学賞を受賞した翌年の1999年3月、アマルティア・センは、国立社会保障・人口問題研究所主催の「厚生政策セミナー：福祉国家の経済と倫理」に寄せて、「福祉・自由・権利」に関する対談（塩野谷祐一前所長との間で）を行った。その中で言及された2つのトピックス、社会的価値の視点に基づいた福祉国家論ならびにリベラルな平等をベースとするコミュニタリアン批判は、当時センが執筆していた2冊の本ときわめて関連の深いものだった。1冊は、*Development as Freedom* (Oxford: Oxford University Press, 1999)であり、他の1冊がこれから紹介をする本書である。

センは、これまでに、*Collective Choice and Social Welfare* (San Francisco: Holden-day, 1970)、*On Economic Inequality* (Oxford: Oxford University Press, 1973, 増補版1997)、*Choice Welfare and Measurement* (Oxford: Basil Blackwell, 1982)をはじめとする多くの理論書を執筆してきた。それらに対して、本書は、講義録を下敷きとする32ページという小品であり、内容的にも理論書というよりはエッセイという方が相応しいかもしれない。だが、同様の性格をもつセンの他の書物 (*Commodities and Capabilities*, Amsterdam: North-Holland, 1985, *On Ethics & Economics*, Basil Blackwell, 1987) などと同様に、本書は、現存する代表的な諸理論の難点を正しく捉え、新たな展望を切り開くに相応しい

独創的なアイデアに満ちている。

本書のテーマは、ジョン・ロールズの正義理論に代表されるリベラル派とコミュニタリアン（共同体主義）との対立的状況を踏まえ、双方（主にはコミュニタリアンからリベラル派へ）の発する批判に耳を傾けることを通じて、各々の理論的射程を見極めること、そして基本的にはロールズ的リベラル派の立場に身を置きながら、コミュニタリアンの主張する社会的自我同一性の観念をもとに、ロールズ正義理論の基本的フレームワークを拡張するような見通しを示すことにある。

2. 自我同一性の問い

はじめに本書におけるセンの基本的な問題関心をとらえよう。

通常、経済学においては、他者あるいは社会との同一化という問題は浮上してこなかった。なぜ、パン屋は彼らの産物を売ろうと欲するのか、なぜ消費者はそれらを買おうとするのかなど、交換活動に従事する個々人の行動原理を説明する際に、自己利益の追求以外の動機を想定する必要はないと考えられたのである。だが、このような見解は、交換活動以外の多様な活動を度外視するものであるうえに、実は、交換システムが有効に機能するためには、責任や信用、その他市場経済を容認するような社会的諸規範、あるいは、個々人のよきビジネス行為を支える道徳が前提条件となっている点

を完全に見逃している。

だが、個人の行動原理を純然たる自己利益の追求として説明する見解を退けることは、社会的自我同一化の観念、すなわち、個々人は自己の属する特定の集団あるいはその構成員に自我を完全に同一化しているという見解を全面的に支持することには直結しない。例えば、個人的行動を倫理的に規制する諸規範・諸価値の受容という観点から、個人の行動原理を考察してみよう。はたして、個人における諸規範・諸価値の受容は、どれくらい究極的に他者への関心あるいは自我同一性の観念によって跡づけられるのだろうか。

ここで、個々人の主体的・反省的な選択による受容という説明をとるにしても、あるいは行動様式の進化的淘汰を通じた受容という説明をとるにしても、あるいは両者の間のさまざまな混合形態を想定するとしても、自我同一性の観念が果たす役割の重要性は明白である。われわれが所属する共同体や共同体のメンバーは、いうまでもなくわれわれの行動、知識、認識、そして道徳的判断に重要な影響をもたらすであろう。そしてわれわれの道徳的判断は共同体の価値や規範によって形成されるのみならず、これらの価値や規範によって絶えず倫理的に査定されるという側面をもっている。

だが、問題は、共同体と諸規範、さらには理性的活動という三者の間の関係である。はたして、我々の自我同一性はどのように表出されるのだろうか。理性的活動はどのくらい自我同一性の形成・発展それ自体を促進するのだろうか。

3. 正義とコミュニタリアン批判

コミュニタリアンは正義への関心から正義の基本原則を導出するという正義理論のアプローチ——例えば、原初状態という仮想的装置から正義の二原理を導出するというロールズの枠組み——を批判する。そして、正義への関心以外の規範や道徳的慣習、例えば、同一のコミュニティに属する他者

への思いやり、愛情、忠誠、連帯という共同的価値の重要性を喚起しようとする。だが、そのような価値の重要性を考慮することは正義理論と矛盾するものではないであろう。その理由をセンは次のように説明する。

第一に、愛情や忠誠、連帯などの共同体的価値の感受なくしては正義は存立しえないという議論が存在する。だが、もし、そうだとしたら、すなわち共同体的価値の感受が正義の構成要件の一部であるか、あるいは前提条件の一つであるとしたら、共同体的価値の指摘は正義観念の重要性それ自身を何ら損ねるものではない。第二に、正義は共同体的価値の感受を構成要件あるいは前提条件とするものではない。公共政策・ルール、行動規範は不可避免的に、愛情や仲間意識に緊密に結び付けられていないような人々をも対象とするものであり、むしろ、このような場面において、効力を発揮するのが正義の観念であるからである。正義の重要性は共同体的紐帯の領域を遥かに超えるものでなくてはならない。

4. 自我同一性の描写と選択

社会的自我同一性の観念には描写と認知という2つの役割があると考えられる。描写とは、個々人の自我が同一化されている特定の集団を同定する作業である。それは、社会的選択のフレームワークにおいては、定義域に関する区分け、すなわち社会的な集計に際して、参照すべき当事者を同定する問題として理解されるであろう。ところで、ある集団を特徴づけるものは、その集団によって共有されている何らかの「共通善」にはかならない。したがって、社会的自我の同定作業は、各々の集団に共有されている「共通善」を特定化する作業を不可欠の前提とするであろう。このような点を確認したうえで、センが指摘するのは、第一に、このような「描写」もまた、本質的に、選択と推論の余地を残しているという点である。

通常、一人の個人は複数のグループに属している。ある個人は同時に、イタリア人としての、女性としての、フェミニストとしての、肉食主義者としての、作家としての、保守主義者としての、ジャズファンとしての、そして、ロンドン在住者としての自我同一性をもつ。そうだとしたら、なぜ、ある個人をある特定の集団との関係で同定するのだろうか。なぜ、ある個人をヨーロッパ人として同定し、イタリア人あるいはドイツ人として同定しないのだろうか。なぜ、ある個人をアイルランド人と同定し、アイルランドのカソリックあるいはプロテスタントとして同定しないのだろうか。そもそも、そのようなグループ分けを行う根拠は何であろうか。このような点を考慮するとき、一般に、個人々人を同定する集団に関する異なる地図と異なる手続きの存在することが、したがって、個人々の社会的自我を描写する際には、想定される複数の代替的な地図と手続きの中で、主題の要請する文脈に応じて最も適切な方法が選択されなければならないことが理解されるのである。

ところで、このように、多元的な自我同一性の可能性を考慮するならば、所与の文脈においても、複数の自我同一性が互いに葛藤を引き起こすことが懸念される。ある国、ある文化に生まれたということは、その国あるいは文化に属する大多数の人が有するパースペクティブや忠誠心とは異なるものを採用する可能性を、何ら軽減するものではないというのが、社会的自我同一性の描写に関して、センの指摘する第二の点である。

5. 発見それとも選択？

続いて、社会的自我同一性の認識的機能についてセンは次のように主張する。コミュニタリアン・アプローチは共同体的自我を、選択によって決定するものではなく、存在する対象に従って発見される何ものかであると考えている。同様に、社会組織とは「人々に彼らが彼ら自身や世界に関して

発見しえたものに対して声をあたえ、他者にその価値を説得するためのものである」と主張する。だが、はたして、自我同一性は本当に「発見される」だけなのだろうか。そうではないとセンは考える。個人々は自我の同定にあたって、選択の問題にかならずや直面するであろう。自分がユダヤ人であることを「発見」した個人は、同時に、国籍や階級や政治的信念などと比較して、ユダヤ人であることに、はたしていかなる重要性を賦与すべきであるかという問いに答えようとするであろう。

選択の問題が確かに存在するにもかかわらず、それを認めないとしたら、理性的推論の使用に代わって順応主義的行動が無批判的に容認されることにもなりかねない。典型的には、そのような順応主義は、古い習慣や実践を理性的な批判から防御するという保守的な意味をもつ。実際、女性に対する不平等な扱いに見られるような伝統的な不平等は、女性という自我同一性が問われることなく受容されることによって存続してきた。問われることのない前提とは問うことができないのではなく、単に問われなかっただけなのである。他面で、自我同一性の無批判的な受容は、突如として根源的な変化を自我同一性にもたらすことがある。

例えば、セン自身が体験したことであるが、1月にはインド人あるいはアジア人という自我同一性をもっていた人々が、突如3月には、ヒンズーやムスリムなどの政治的共同体に分かれてしまった。彼らは、理性的な営みの欠如した固い行動のもとで、より分割された自我同一性を「発見した」のであり、反面、それに対して批判的吟味を行うことには、完全に失敗したのである。このように、自我同一性に関して、多元性、選択そして理性的活動を否定することは、暴力、蛮行、抑圧の源泉となるであろう。選択は、個人的行為においても、社会的決定においても重要であることをセンは改めて注記する。

6. 認識と文化

ただし、その際の選択とは、いかなる自我同一性によっても「邪魔されない」位置からの選択を意味するものではない。むしろ、ひとが偶々位置してしまった何らかの拘束的な位置に存在し続けながら行うような選択である。選択とは、どこにも存在しないところからどこかへジャンプするようなものではないのである。われわれの理性的活動は確かに、憶測や傾向性によって影響される。だが、そのことは即、特定の文化的伝統の内、特定の自我同一性のもとでのみ理性的活動が可能であることを意味するものではないとセンは主張する。

影響することは決定することと同じではない。文化的な影響が存在するとしても、そしてそれが重要であるとしても、選択の余地は確かに残されている。いわゆる「文化」は、一意に定義された態度や信念の集合をもつわけではない。「文化」は非常に多くの内的多様性を持ち、異なる態度や信念が同一の幅広く定義された文化のもとに受容されるであろう。そして、一人前のおとなは、自分が教えられたことを問い返すことができる。たとえ環境的にそのような習慣が阻害されたとしても、疑い、問い返す力は一人ひとりの能力のうちに確かに備わっているのである。同じく伝統を尊重するといっても、選択の余地があったにも関わらず、あえてある特定の伝統から離反することを選ばないことと、理性的活動なしにある特定の伝統に帰依することでは、その意味するところは全く異なるものであろう。共同体や自我が有する認識的な役割がいかに重要であろうとも、理性的な選択活動の可能性が否定されることはないであろう。

7. 境界を越えた自我と正義

以上のように、センは社会的自我の多元性に関する認識をベースに、個人の主体的な選択や理性的活動の重要性を強調する。さらに、個別的な集団の境界を越えて、より一般的な社会的諸関係に

適用されるより普遍的な正義理論の意義を認識している。そのような立場は、まさにリベラルな規範理論にはかならない。だが、他方で彼は、共同体主義が提示する社会的自我の実体的な観念それ自身の重要性を理解する。

すなわちセンは、異なる複数の集団——協会、属性、職業、コミュニティなど——に属する個々人が、各々の集団に対応する異なる複数の価値や目的を内的に整合化していくプロセスの中に、より一般的な正義原理に対する規範的合意の可能性を見出すのである。

「原初状態の装置を、(ロールズが提示する)分断された2段階構造としてではなく、異なる協会や集団を含む重複的な構造として再構成する。このような装置は、複数の信念を含む相対立した正義の諸要求を出現させるかもしれない。だが、そうだとしたとしても、正義の理論を、実践的計画の厳密な青写真としてではなく、個人や集団の直面する倫理的要請を明示化するための政治的思考として理解するならば、このような緩やかな定式化こそは、われわれの多様な関心と多様な自我に対して、より強固でありかつ公正であるといえるだろう。」(本書、p. 30)

かくして、彼は、ロールズ正義論における正義の基本原則とそれに対する合意の仕組みに関して、次のようなきわめて独創的な構想を提出するのである。

異なる複数の集団は、価値や目的のみならず、主題とする問題や関心においても互いに異なるものである。そうだとしたら、比喩的に他人の立場に身を置くのではなく、実際に多様な集団・カテゴリーに重複的に属する個々人の、自己を内面的に統合化していく営みこそが、互いの異質性に対する了解と部分的合意をもたらし、相対立する利害や目的を調整しうる一般的・普遍的ルール成立を可能とするのではないか。

8. 結びに代えて

さて、以上のような内容をもつ本書に関して、再度、その意義を確認しよう。基本的に個人を理性

的活動の主体として捉えながらも、そのような活動主体である個人をトータルな自我として眺めるとき、異なる複数の集団に属し、各々の集団で要請される規範や価値を受容しているひとの姿が浮上する。いうまでもなく、各々の集団は異なる目的や価値や規範をもつものであるから、ときに個人は相異なる集団の要請に、自我が分裂しそうな危機に見舞われるだろう。そのとき、彼は、異なる複数の集団間の目的や価値や規範の社会的な対立を、いわば自己の内面において再現することになるのである。社会的自我の観念は、個人の選択は単なる私的関心に基づく自己利益最大化行動ではなく、異なる複数の目的・価値・規範に対する社会的関心を背景とする、絶え間ない分裂的自我の統一化の過程にほかならないことを気付かせてくれるのである。

ここで、次なる問題は、このような複数の社会的・共同体的関心をもとに、自我を統合化していこうとする主体の行動原理の内実を捉えることである。はたして、それは、依然として自己利益最大化動機

に基づく行動原理として、もしくは特定の集団に特化された関心に基づく行動原理として解釈されるのか、あるいは、自己の私的関心からも、いかなる集団的関心からも相対的に距離を置いた、いわば公共的関心に基づく行動原理として理解されるのか。

おそらく主題に応じて、いずれの解釈も有効性をもちうるであろう。だが、本書にてセンが着目するのは後者である。すなわち、正義の基本原則のような公共的ルールを社会的に決定するという問題において、様々な社会関係に身を置きながら、そして複数の個別的視点をもちながら、それらを統合化しようとする個々人の営みを想定するとき、ロールズの正義理論において構想されていた二段階ステージあるいは他段階ステージモデルとは異なった正当化の構図を描くことができるというのが彼の提示した基本的なアイデアであった。繰り返すが、このようなアイデアは、ロールズ正義理論を拡張するうえで画期的な意義をもつものである。

(ごとう・れいこ 国立社会保障・人口問題研究所
総合企画部第二室長)